吉野歴史資料館だより

たぎつみやどころ

第７号
（通算第１０号）

国栖の入野峠から望む吉野川

元正天皇と吉野宮のつながりを想う　―　生駒 あさみ氏「元正天皇と吉野宮」

資料館ＨＰでも情報発信中！ http://www.town.yoshino.nara.jp/about/shisetsu/dentou/rekishishiryokan.html

QR コード⇒

新たな県指定文化財

令和3年3月、吉野町内で2件の奈良県指定文化財が増えました。吉野神宮と櫻本坊所蔵の絹本著色不動二童子像（けんぽんちゃくしょくふどうにどうじぞう）です。これで吉野町の文化財は国指定53件、県指定26件、町指定4件となりました。

宮滝に観光看板たちました

このたび、宮滝遺跡を紹介する看板が宮滝にたちました。資料館敷地内や宮滝駐在所の傍など、宮滝各所に案内板がたっています。お越しの際はご覧ください。

町内に残る歴史ゆかりの場所

吉野町には、歴史にまつわる伝説やゆかりの場所がたくさんあります。そうした伝説を紹介する資料をつくりました。

現在は、壬申の乱、源義経、南朝、能にまつわる資料をご用意しています。資料館や吉野町役場、ＨＰで公開・配布していますので、ご利用ください。

なお、本にのる伝説を集めたので、少し違う伝説が各地に伝わっている可能性があります。ご了承ください。

吉野歴史資料館だよりは、希望される方に無料でお送りしております。詳しくはお問い合わせください。

壬申の乱と竹取物語 ―1350年にむけて

令和3年は聖徳太子没後1400年。そして令和4年は、吉野町にもゆかりの深い「壬申の乱」から1350年の記念年なります！

壬申の乱は飛鳥時代の戦乱で、大海人皇子と大友皇子が天皇の位を巡って争いました。大海人皇子は戦乱前を吉野宮（宮滝）ですごし、吉野から戦地へ向かったことでも知られます。

さて、その壬申の乱。今も小説やマンガで描かれるなど、人気ある事件ですが、実は「竹取物語」にも関係があることをご存じですか？

竹から生まれたかぐや姫は美しい女性に育ち、5人の貴公子から求婚されます。その5人は、阿部御主人（あべのみうし）、大伴御行（おおとものみゆき）、石上麻呂（いそのかみのまろ）、石作皇子（いしつくりのみこ）、車持皇子（くらもちのみこ）。このうち、阿部御主人・大伴御行・石上麻呂は実在する人物で、壬申の乱で活躍した人物です。残る石作皇子は多治比真人嶋（たじひのまひとしま）、車持皇子は藤原不比等（ふじわらのふひと）がそれぞれモデルとされます。やはり壬申の乱と無縁ではありません。

思わぬ作品ともつながる壬申の乱。1349年の歴史の中で、どのように語られてきたのでしょう。調べてみるのも面白そうです。

資料館からのお知らせ・報告（令和３年度の文化財事業やイベント等）

【注意！】下記イベントは、新型コロナウィルス感染症の状況によって、内容が変更となる場合があります。悪しからずご了承ください。

入門講座

●入門「壬申の乱」吉野の歴史、ソコが知りたい！

日時：12月11日（土）14：00～15：30
会場：吉野町中央公民館 大ホール
定員：１００名　参加費：３００円
申込：Fax・往復はがき・電子メールで、吉野町産業観光課まで参加希望者の住所・氏名・連絡先をお知らせください。

連携講座《with 近鉄文化サロン阿倍野》

●飯貝本善寺の歴史

講師：岡村 喜史 氏（本願寺史料研究所）
日時：11月27日（土）13：30～15：00
会場・申込先：近鉄文化サロン阿倍野（あべのand内）

《with 熊野古道センター》

●すべては一畳敷に集められた
-松浦武四郎が熊野・吉野で成したこと-

講師：当館職員　日時：1月15日（土）
会場・申込先：三重県立熊野古道センター

吉野が紹介されます・されました！

左の刊行物等に記事や写真等を提供しました。

・『県民だより奈良』4月号　・『歴史人』6月号
・『月刊シルバー人材センター』5月号　・『竜門大宮』
・『月刊奈良』6月号　・『吉野山の西行木柱歌碑』
・TV・ゆうドキッ！　・HP・奈良、旅もくらしも
・TV・迷信探偵ファイル　・TV・グッドモーニング
・MM・南都銀行　・『女たちの壬申の乱』文春新書
・「イラストでつなぐ奈良時代のみやこ」展・平城宮いざない館

【編集】吉野歴史資料館　奈良県吉野郡吉野町宮滝348　※現在は土日祝日のみ開館。12月～2月は冬季休館。お問い合わせは左記まで。
【発行】吉野町産業観光課　奈良県吉野郡吉野町上市80－1　☎.0746-32-3081　mail: bunkazai@town.yoshino.lg.jp

【コラム】上市がオリンピックゆかりの街だったって、ご存じでした？

気がつけば２０２１年も年末が近づいてきました。何だか遠い昔のような気もしますが、今年はオリンピックイヤーでしたね。4月12日の朝には、吉野町内を聖火が駆けぬけ、7月23日～8月8日の間、東京五輪が開催されました。

東京五輪では日本代表選手によって金27個、銀14個、銅17個ものメダルが獲得されました。ＴＶなどで観戦された方も多いのではないでしょうか。新型コロナウィルスがあったので、オリンピック開催の是非には色々な意見が出されていますが、それは今後の検証をまつことにしましょう。

◇

さて、せっかくの機会ですので、オリンピックと吉野の歴史について、少し紙面をいただいてご紹介いたします。「吉野とオリンピックのかかわり」といわれても、何か関係あるの？お思いの方も多いことでしょう。ですが歴史をひもときますと、実は、吉野はオリンピックに深く関わりのある場所だったことが分かるのです。

今からおよそ百年前の昭和元年。当時の上市町に、美吉野グラウンドとよばれた運動施設がつくられました。甲子園球場1・5個分の土地（6万6千㎡）に、陸上競技場、テニス場、野球場、相撲場がたちならぶ、充実した施設でした。このグランドをつくったのは吉野鉄道株式会社。現在の近鉄吉野線の前身となった会社でした。

◇

このグラウンドでは、日本女子オリンピックや全日本女子東西対抗陸上競技大会という、女子スポーツの全国大会がたびたび開かれました。また、このグラウンドで日本記録も更新されていて、今も日本学生陸上競技連合のホームページなどで確認することができます。

それだけではありません。このグランドは、日本人女性初のメダリスト・人見絹江（ひとみきぬえ）さんや、ロサンゼルス五輪の金メダリストである吉岡隆徳（よしおかたかよし）さん、南部忠平（なんぶちゅうへい）さんが、練習をしたり、合宿をしたりした場所でもあったのです。合宿後には、上市の子どもたち（当時）が選手への激励をしたこともあったようです。

なぜ、当時のオリンピック選手が吉野で練習をしたのでしょう。実はこのグラウンドの管理人が、谷三三五（さざご）というパリオリンピック出場選手（陸上）だったのです。彼の指導をうけるため、人見さんや吉岡さんたちは吉野へ通ったのでした。昭和3年には、人見さんや吉岡さんが上市町の谷さん宅に泊まりこみ、オリンピック予選に向けた猛練習をしていたことが記録に残されています。

◇

いかがだったでしょう。吉野が百年前のオリンピック選手をささえた町だった、なんて素敵ですよね。今回は吉野とオリンピックの歴史をご紹介しました。いつもとは少し毛色のちがうお話でしたが、お楽しみいただけましたら幸いです。

【特別寄稿】

元正天皇と吉野宮

編集プロダクション ココトソコノ制作室　生駒 あさみ

◇

飛鳥時代・奈良時代にかけて、吉野には多くの天皇が行幸しています。吉野宮を造営した斉明天皇や、吉野が壬申の乱の挙兵の地となった天武天皇と皇后・鸕野讃良皇女（のちの持統天皇）の名前がよく挙がりますが、今回は天武・持統天皇の孫であり奈良時代の女帝だった、元正天皇と吉野（宮滝）との関わりをみていきたいと思います。

◇

元正天皇の諱※1は氷高皇女（日高、新家とも）といいます。天武天皇9（680）年生まれ。父は天武・持統天皇の子である草壁皇子、母は天智天皇の娘である阿閇皇女（のちの元明天皇）です。

氷高皇女が誕生する前年の天武天皇8（679）年5月5日、「吉野の盟約」が行われました。これは壬申の乱挙兵の地・吉野に行幸し、天武天皇と皇后・鸕野讃良皇女の前で、天武天皇の皇子（草壁、大津、高市、忍壁）と、天智天皇の皇子（川島、志貴）の6人に、「草壁皇子を次期天皇とし、異母兄弟同士互いに助け、相争わないこと」を誓わせたことを指します。壬申の乱は天武天皇と、天智天皇の子の大友皇子の皇位継承争いでした。「吉野の盟約」は、もしかすると阿閇皇女が氷高皇女を妊娠したことを契機に、草壁皇子の次世代を考えて行われたものだったのかもしれません。だとすれば、氷高皇女にとって「吉野」は誕生前から特別な土地だったといえます。

天武天皇の崩御後、父の草壁皇子は天皇に即位することなく28歳で薨去※2してしまい、祖母の持統天皇が即位しました。

氷高皇女が10歳頃のことです。宮滝を語るとき必ず登場する持統天皇は、在位中の8年間に31回、退位してからも2回、吉野に行幸をしています。随行者の詳細な記録はありませんが、『万葉集』の歌や『懐風藻』の漢詩の作者から、皇族から官人まで、多くの人々が共に訪れていたことがわかっています。持統天皇の孫の氷高皇女も、母や兄弟とともに、10代の多感な時期に随行していたかもしれません。飛鳥から藤原に都が遷っても、吉野行幸は続きました。

◇

持統天皇が譲位した氷高皇女の弟・軽皇子（文武天皇）もまた、在位中に2回吉野に行幸しています。しかしこの後しばらく、正史である『続日本紀』によると、吉野行幸は途絶えていたようです。文武天皇が25歳で崩御※3した後は、氷高皇女の母・阿閇皇女が即位しましたが（元明天皇）、平城京に遷都して吉野が遠くなったためか、元明天皇時代は吉野への行幸の記録はありません。ただ、この頃は、平城宮の北にある甕原離宮に4度行幸をしてます。甕原離宮の場所はのちの恭仁京の付近だと考えられていますが、木津川の流れを宮滝に見立てたのではないか

…とする説もあります。実際に目にすると、大きな岩石や、蛇行する雄大な水の流れは、宮滝を彷彿とさせる風景です。ここにもまた、氷高皇女は随行していたかもしれません。

そして元明天皇は氷高皇女（元正天皇）に譲位※4をします。36歳で即位しました。元正天皇は、即位して8年目の養老7（723）年、吉野に行幸をしています。文武天皇の行幸から21年後のことです。数年前、宮滝遺跡の吉野川にほど近い場所で大型建物跡の発掘調査がありましたが、あの建物に滞在していたのかもしれません。

◇

正史『日本書紀』の完成が奏上※5されたのは元正天皇の時代、吉野行幸の3年前の養老4（720）年のこと。壬申の乱のことも吉野盟約のことも、元正天皇は周囲からたびたび聞いていたと思いますが、それらは『日本書紀』にもしっかり記されています。養老期の吉野行幸は、壬申の乱から50年余りたち、戦いの記憶も薄れた時代。甥の首皇子も含め、年若い皇族や官人に、歴史と吉野の地の重要性を伝えるための行幸だったのかもしれません。元正天皇在位中の吉野への行幸は1回のみで、この翌年、元正天皇は首皇子（聖武天皇）に譲位をしています。『万葉集』には、この行幸中に詠まれた、過去の帝の世に思いを馳せる歌、土地を讃える歌が残っています。

退位してからの元正天皇は正史にはあまり登場しませんが、神亀元（724）年、天平8（736）年の聖武天皇の吉野行幸は存命中ですので、同行していた可能性があります。

曾祖母が宮を造営し、祖父と祖母が壬申の乱の出発地としても大切にしてきた吉野。吉野盟約で父にもゆかりがあり、祖母に同行して10代、20代と何度も足を運んだかもしれません。

周囲の状況から考えても、元正天皇にとって生涯、吉野は特別な地だったと言えるのではないでしょうか。

【編注】

※1 諱：天皇に即位する前のお名前のこと。
※2 薨去：皇族や高位の貴族が亡くなること。
※3 崩御：天皇や皇后が亡くなること。
※4 譲位：天皇が、存命中にその位を譲ること。
※5 奏上：天皇に報告すること。